

「日本3.0」

Vol.25

さよなら、アメリカ崇拜

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

先日、学生るとき以来、18年ぶりにニューヨークを訪れる機会がありました。久々のニューヨーク旅行を心待ちにしていたのですが、いざ過ごしてみると「ニューヨークってこんな感じだったかなあ」と少し拍子抜けしてしまいました。

街を歩いてもなんだかワクワクしません。単に私の感覚が落ちたせいとか、東京とニューヨークの差がなくなったせいとか、ニューヨークの勢いが衰えたせいとか、その理由は定かではないのですが、どうもテンションが上がってき

ません。

私は編集者として長年、経済ニュースを追ってきましたが、最近、ニューヨーク発のニュースが目立ちません。世界の中心はアジア、とくに中国に移りつつありますし、ニューヨークが誇る金融産業やメディア産業の勢いも衰えています。「ニューヨーク＝世界の圧倒的な中心」という時代は終わりつつあるように感じます。

アメリカでは、西海岸のシリコンバレーからも往時の輝きが消えつつあります。シリコンバレーから出ていく人の数が近年増えて続けているのです。

シリコンバレーはここ数年、家賃、食費、人件費などあらゆるコストが急上昇。フェイスブックの社員の給与の中央値は約2500万円に達しています。年収1000万円あっても、ひもじい暮らししかできない。IT業界以外の人間は豊かに暮らせない。IT企業のエリート層とその他の人々の格差がおそろしいほどに開いているのです。

アメリカという国は、波があっても、その都度復活する国ですから、また盛

り返すかもしれません。

ただ、大きな趨勢として、アジア、とくに台北、ソウル、北京、上海、深圳、シンガポールといった都市のほうが、スリリングになっていくことは間違いないように感じます。

私自身、4年前にニュースアプリのベンチャー企業に移籍して以来、新しいサービスやコンテンツを開発する際には、アメリカの先駆者を参考にするのが常でした。しかし最近、アメリカよりも、中国の企業から刺激を受けています。中国が世界の最先端を突き進む分野が増えているのです。

日本はこれまでビジネスにおいて、アメリカばかりを手本にしてきました。しかし今後は、日本の地の利を生かして、米国にもアジアにも学びつつ、日本の独自性に磨きをかけていくべきです。時代遅れのアメリカ崇拜や、アジアに対する優越感にさよならして、日本人が素直に世界のベストプラクティスに学べるようになったとき、日本は新たなステージに到達できるのではないのでしょうか。



Profile

NewsPicks CCO (チーフコンテンツオフィサー)

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。2014年7月からソーシャル経済メディア「NewsPicks」の編集長を務めた。2018年4月より現職。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」「日本3.0」がある